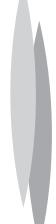
• 文談 壱千八

念 正 崗子 規 $\widehat{36}$ の続き》 その 295

なった。



天涯茫々生

河東碧梧桐の続き。

文化欄、三面主筆などをつとめた。 誌「ホトトギス」、その他各種の新聞の俳句欄 に加わる。新聞「日本」、松山から東遷後の句 二髙退学後、 上京して子規の俳句革新運動

れている。 に傾いていった。虚子を道灌山に招き、 者たらんことを望むなどにそのことはあらわ 梧桐の方に重きをおいていたが、次第に虚子 子規は碧虚の二人については、 はじめは碧 後継

与えたのは、新傾向時代である。 く変化していくが、俳壇に最も大きな影響を 新傾向から無季、 句風の相違は、 明治36年いよいよそれがはっきりした。 、後の碧梧桐の俳句は、 子規生前からきざしていた 自由律、 ルビ附き句と大き 定型から新傾向、

ら出ている。 号)に由来する。 「俳句界の新傾向」(「アカネ」 明四一・二創刊 そもそも新傾向の語は、大須賀乙字の論文 それまでの碧梧桐の句風か

から虚子、 聞「日本」 碧梧桐は子規の歿後、 虚子の伝統的、 碧梧桐の句風の相違は明らかにな の俳句欄の選者となるが、 碧の現実的写実的態度と そのあとを継いで新 この頃

> ある。 が一時は俳誌よりは文芸誌の感を呈し、 俳書堂の経営に腐心していて、「ホトトギス」 も俳句を顧みず、 に漱石の「猫」や「坊ちゃん」を載せ、 集め、俳壇は碧梧桐を中心にして燃え上った。 んな気運の醸成に努め、 あたかもその頃、虚子は「ホトトギス」と 明治37年秋頃から39年夏にかけて、碧は盛 小説を多作していた時代で 周辺に多くの俊秀を 本人 同誌

60円の援助という。 年にかけて全国を遍歴し、 の援助によるもので、 起し、俳壇を風靡した。旅行は大谷句佛上人 この気運に乗じ、 碧梧桐は明治39年から44 毎月留守宅30円、旅費 新傾向運動をまき

果まで来ている。もちろん、札幌にも来た。 日一信の形であらわされた。北海道の根室 その旅行記は「三千里」「続三千里」として、 貸家に厩あるなり落椿(札幌)海凍る国に鮭鮓甘きかな(根室)

ながらの放談で、東京共立学校時代の同窓 いえる。南方氏が朝からビールをガブ飲みし ながら、南方氏の奇行を伝える珍しい文章と 謀 正岡子規や、日本海海戦で有名な秋山眞之参 楠に会う一条など、俳句とは関係のないこと (これも同窓) |続三千里||の明治44年3月12日に紀伊田辺 当時既に有名であった粘菌学者の南方熊 の話なども出ている。

的なもので、 碧梧桐の態度はたしかに時代に応じた進歩 俳句及び俳人に始めて近代性を

> 築落の奥降らば鮎はこの尾鰭る後にはルビ附きなどの句(?)も作った。 た拙速、 た。同人との意志の疎通を欠いたことによる。 ら一年餘欧米を漫遊、帰朝後 紅」を創め、 自由律俳句を展開するに至る。大正4年「海 に季題にも定型にもとらわれない作を試み、 帯びさせるものであったが、その急進には 回を連載した。主張と共に実作を発表した の俳論としては最大にして最後の長文二十四 た。「三味」には「我等の立場」と題して、彼 更に個人誌「碧」、 次第に無季、 独走的なものがあった。そして次第 自由律に転じた。大正9年末か 自由律と進展して行って最 続いて「三味」を創刊し 「海紅」と断っ

(昭和六年)

後には自らも「詩」と称している。 になった。もう俳句とも云えないようだ。最 などは、一読しただけでは意味も分らぬよう

退を表明した。 和8年3月25日、 俳句ではなく詩となり、 還暦祝賀会の席上、俳壇引 遂に行き詰り、 昭

新宿区)戸塚に新居を得た祝宴を催したの あったが最晩年、門人らの好意で淀橋区(現 月1日にはもうこの世を去った。 俳壇引退後の碧梧桐の生活は淋しいもので 昭和12年1月22日で、その一週間後の2

る。 にうかうかと乗せられて、 評論家山本健吉は、 うまうまと大家にのし上ったと云ってい そうともとれる。 碧梧桐も虚子も、 俳句の世界にはい 子規